

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

2015
No.456

ボランティア情報 5



かーちゃんたちの団結力で 地域を元気に

東日本大震災の原発事故の影響で、避難生活を余儀なくされた厳しい状況の中、避難で生散り散りになった阿武隈地域のかーちゃん（女性農業者）たちに声をかけることから、活動はスタートした。

震災前から地域づくりで交流のあった、福島大学の先生からプロジェクトの構想を聞き、「煙を奪われたかーちゃんたちの技術を生かかし、おふくろの味を伝えることで地域を元気にしていい」という趣旨に賛同してこの活動に携わることになったと会長の渡邊さんは振り返る。

渡邊さんは繋がりのあつたかーちゃんたちを一人ひとり訪ね歩き、気持ちを聞いて回った。「先が見えず不安」「生きがいなくなつた」という悲観的な声が目立つたが、一方で「このままじゃいけない」「何かできる事をしたい」という声もあり、そんな思いを抱くかーちゃんと一緒にプロジェクトは動き出す。

立ち上げは平成23年の10月。主な活動は地域の食材を生かした食品の製造・販売や、手がける商品は、仮設の食生活改善を目指した健康弁当のほか、お餅やお菓子、惣菜など、バラエティに富み、流通は県外にも広がっている。何よりも生きがいを取り戻したかーちゃんたちに笑顔が戻り、地域を明るく照らしている。

「失つたものはたくさんあるけれど、立ちはだちはいけない。7月以降にはプロジェクトの組織が変わり、「NPO法人かーちゃんの力・プロジェクト」ふくしまとなる予定です！」と渡邊さんは力強く話してくれた。

福島県福島市



かーちゃんの力・
プロジェクト協議会
会長
わた なべ こ
渡邊 とみ子さん

Contents

5月号 特集テーマ

子どもの遊びとボランティア

06 災害ボラセン運営の現場

日常・災害時に社協職員として
どう行動するか

07 ボラセンそもそも ヒストリー

07 団体を応援するために 知っておきたい助成金のキホン

第2回
助成が「当たる」ことは絶対、ない

08・保険のひろば

- ・ボラフェスふくしま番外編
- ・INFORMATION
- ・事務局だより



子どもの遊びとボランティア

児童福祉法第1条で「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならぬ」と規定されているように、子どもの成長は地域全体で誰もが関わることが求められています。

子育て支援については、サロンや放課後スペースなど、さまざまなボランティア活動がこれまでに行われてきていますが、こうした取り組みのなかで、子どもの「遊び」ということに着目した支援が広がっています。

今回の特集では、遊びへの支援を通じて、親や保育者と子どものコミュニケーションや関係作りの促進、さまざまなルールの中で行動する社会性を育むなど、子どもたちの健全育成に大きな役割を果たしている事例を紹介します。



東京おもちゃ美術館
おもちゃ学芸員

東京おもちゃ美術館
チーフディレクター

松岡 木綿子さん 星野 太郎さん

認定NPO法人 日本グッド・トイ委員会

設立:1984年。2003年にNPO法人格取得、2010年に認定NPO法人取得

活動内容

日本グッド・トイ委員会では、おもちゃの専門家「おもちゃコンサルタント」^{※1}という“ヒト”が、優良玩具「グッド・トイ」という“モノ”を活用し、交流を促す活動を推進している。全国各地で活動を展開し、遊びのコーディネートや手作りおもちゃの指導などを通じ、日本に良質な遊びを広めることで、社会が豊かになるお手伝いをしている。

東京おもちゃ美術館

赤ちゃんからお年寄りまでの多世代にとって豊かな出番と楽しみを有するミュージアム。11の豊かな空間でおもちゃを実際に手に取り遊べる。見て、さわって、作って、遊ぶ、ここちよい時間を、子どもと大人が一緒に楽しめる。

おもちゃ学芸員^{※2}(ボランティアスタッフ)をはじめ地域の方々と協力して運営を進めている。

来館者数

年間約13万人

親子で遊ぶ美術館を目指して

星野 日本グッド・トイ委員会は、芸術教育研究所^{※3}前所長の多田信作さんが1984年に設立しました。おもちゃ美術館は委員会設立と同時に開館し、2008年から旧四谷第四小学校校舎を活用しています。

東京おもちゃ美術館では、おもちゃ学芸員が遊びに来た子どもと大人におもちゃを活用した遊び方を教えながら交流しています。18歳からシニア世代までの約270人がおもちゃ学芸員に登録し(2015年5月現在)、毎日10人ほどのスタッフが活動しています。

松岡 私は保育所を退職するときに恩師の園長から勧められ、おもちゃ学芸員になりました。来館者のみなさまと一緒に遊んだり、おもちゃの遊び方をお伝えしたり、みなさんがどんなふうに遊んでいるかなど見守ったりしています。

星野 おもちゃ学芸員による遊びのパフォーマンスも行っています。

松岡 私は人形や布を使って「見るおはなしイベント・こぐまとこぶたのミニシアター」を行っています。このなかで、こぐまとこぶたのお人形がいろんなことをするのですが、来館した親子さんが「あんなふうにしても

遊べるんだな」「あのおもちゃで私も遊んでみたい」などと思ってもらえるように心がけています。

一人ひとりがもっている力 子どもの発想力と笑顔がモチベーションに

松岡 子どもたちが遊んでいる様子を見て、「こんな遊び方もできるんだ」と気づかせられることもあります。先日、5~6歳くらいの男の子が、木のトラックのおもちゃと他のおもちゃを組み合わせていたのですが



こぐまとこぶたのミニシアター

※1 優良なおもちゃや、遊びをバランスよく与えることのできる「遊びの栄養士」。赤ちゃんの発達とおもちゃの関わり方から、お年寄りのリハビリおもちゃまで、「幅広い視点」でおもちゃを捉えることのできる「おもちゃコンサルタント養成講座」を開催。全国で5,000名ほどの有資格者が、子育て支援や幼児教育、難病児の遊びケアなどの社会貢献、おもちゃの企画開発などさまざまな現場で活躍している。

※2 遊び方のわからないおもちゃの解説をするだけでなく、遊びの楽しさを伝える、来館者とおもちゃを結ぶ架け橋的な存在。2日間の「おもちゃ学芸員」養成講座を経て、年齢や職業も様々な方が登録して活動している。

※3 1957年設立。教師や保育者等とともに、子どもの絵画・工作・遊び等の表現教育について約50年にわたって実践研究。現在、高齢者介護の現場へも目を向け、子どもたちのために豊かな文化を生み出そうとする人々から、お年寄りたちの自己実現が可能となる社会を創り出そうとする人々まで、共に学び合う場作りを目指している。



認定NPO法人 日本グッド・トイ委員会
(東京都新宿区)

遊びを通して五感やコミュニケーション力を養い、夢を育てる 遊びを通じて、一人ひとりを応援したい

「なにをしているの?」と尋ねると、「調べているんだよ」と言うのです。荷物の検査をしていたのですね。実際にどこかで見たのかもしれません、「こうやってみよう」と2つのおもちゃを組み合わせて、彼が考えたことを具現化していた。子どもの力、発想の豊かさにとても感動しました。

子どもとどう遊んだらよいのか 悩みを抱える親は 少なくないのではないか

星野 今の遊びに関しては、ゲーム機など、人とのコミュニケーションをとらなくても完結する遊びが広がっていると感じています。

私たちが一番の目標としているのは、「おもちゃと遊びの力によって人と人とのコミュニケーションをよくしていこう」ということです。まず、親子のコミュニケーションを重要視しており、親子と一緒に遊ぶことを1つのコンセプトとしています。そのため、おもちゃ美術館は、子どもだけで遊びに来る場ではなく、子どもと大人が一緒に入館して遊ぶ場としています。そして、もう1つの軸として、多世代コミュニケーションも大切にしています。

核家族が多く、おじいちゃん、おばあちゃんと接する機会が少なくなっているなか、シニア世代の学芸員と交流することで、子育て中の親御さんに何かを貢えることができれ

ばと思っています。

実際にどんなおもちゃで遊ばせたらよいのか。それは、「子どもとなにをして遊びたいか」ということを考えればよいのだと思います。

松岡 コマを例にあげると、お子さんがコマを回す遊び方ができる年齢に達していないときには、コマを並べるなど、お子さんと一緒にできる遊び方をしても楽しいですよね。「お部屋ができたね。じゃあ、お部屋をいっぱいいくつってみよう」というふうに。マニュアルに縛られるのではなく、親御さんに「こんなふうに遊べます」と伝えると、安心された様子になりますね。「こういうふうに遊ばせなきゃいけない」から「こういうふうに遊んでもいいんだ!」という感じで。

遊びを通じて親子の コミュニケーションを円滑に

星野 おもちゃそのものよりもそれをどう紹介するか、どう使うかによっておもちゃの魅力は変わってくると思います。おもちゃで親子が楽しく遊ぶことは大切だと思いますが、楽しいといっても、成功体験が楽しいこともありますし、音を楽しむとか五感的な楽しみ方も

あります。それを、おもちゃから感じることができれば会話も弾み、広がっていくのではないかでしょうか。

松岡 子どもは大人のことをよくみています。大人はもっと感情を表すことが大切だと思います。楽しいことは「楽しいね」「面白いね」と、大人がまず楽しんで、もっともっと表情に出す。こうした大人の想像力が、子どもの想像力に結びついていくのだと思います。

星野 「どのように遊ばせればよいのかわからない」ということは、「どのように話してよいのかわからない」ということに通じるのかなという気がします。コミュニケーションが広がれば、子どもとの心の距離も近くなつて、共感や信頼が生まれてくるのだと思います。おもちゃという媒介を通じてコミュニケーションを円滑にすることができれば、それが子どもとの遊びにつながると思います。



ボランティア情報

特集

FEATURE ARTICLES

事例2



子育てネットワーク
久喜んこ（埼玉県久喜市）
**子どもを通じて出で
あたたかいつなが
地域のみんなで子**



スタッフ

代表

庄司美智子さん 金井 清恵さん

子育てネットワーク・久喜んこ

設立：2007年に埼玉県久喜市の地域の団体、個人のボランティアなどが集まり設立

事業

おしゃべりサロン
子育て講座
孫育て講座
ふれあい体験授業
絵本講演会
パパ応援企画（パパのためのおしゃべりサロン、パパも一緒に遊ぶ会）
保育ボランティア養成講座

**子育て・子育ちを地域で
支えていく
そのために、私たちに
なにができるのか**

金井 子育てネットワーク・久喜んこは、埼玉県久喜市内の団体や個人が意見を出し合って2007年に立ち上げました。

私は娘が3歳と1歳のときに久喜市に引っ越してきましたが、私の住んでいる地域は各地から引っ越してきた人たちが多く、つながりが

希薄だと感じていました。地域が関わりをもてば、親たちが安心して子育てできるのではないか。子どもたちの成長を考えても、地域の人たちの関わりが必要ではいかと考えて、地域で出会いをつくると、子どもと親が遊ぶ場をつくり、子育てサークル「にこにこくらぶ」を始めました。

庄司 私は子育てが楽しかったので、この経験をみなさんと共有できたらと思い、「にこにこくらぶ」に参加しました。

金井 今は赤ちゃんを連れたママたちのふれあいの場「赤ちゃんサロンいちごみるく」など複数の活動を行う「子育て応援団いちご畑」という団体に発展しています。

また、当時から市内には子どもに関わる多くのボランティア活動が活発でしたので、地域の団体や個人の方々と1年半ほど話し合いを重ね、「いちご畑」を含むNPO法人等23の団体が連携する「子育てネットワーク・久喜んこ」という形でネットワーク化をしました。

その後、子育て講座などの勉強会やおしゃべりサロン、また、母親と子どもの心に寄り添った保育をしたいという思いから、保育ボランティア養成講座などを始めました。久喜んこのスタッフは連携している団体の人たちや活動に参加したママたちがし

ています。お手伝いなどにも多くのボランティアの方が関わっています。

**子どもが育つには遊びは不可欠
遊びは生活そのもの**

金井 遊ぶことは、子どもにとって大切なことです。私は幼稚園で教員をしていましたが、私が働いていた幼稚園は、遊びを通して一人ひとりに合った教育をめざしていました。

子どもたちが自分たちで遊びをみつけて、夢中になって遊ぶ。「自分はこれが楽しい！」と子どもたちが気づき、自分で遊びを考えたり、友達と一緒にしたりをしたり大人に助けられたりしながら成長する。子どもが育つには遊びが大事なのだと感じました。遊びというより、生活そのものなのだと思います。

庄司 「赤ちゃんサロンいちごみるく」では、絵本をよんだり、わらべうたを歌ったり、遊びながら、子どもたちとママたちと一緒に遊んで一緒に育ちあえるといいなと思って活動しています。

**親たちは準備できていない
地域の人たちの支えが
必要なのです**

金井 今の時代は遊びよりも勉強という流れが社会にあり、それが乳幼児期にまで降りてきていると感じています。その流れのなかにいた人

会い、 りを作る 育てていきませんか

たちが親や祖父母になっている時代になっているのです。遊びを大切にする体験をしておらず、また、子どものことを知るチャンスがないのに、親になったばかりのママやパパたちに、子育てにおける「選択をしなさい」と言っても、判断をするのはとても難しいことだと思うのです。子どもの成長に合わせた教育を社会全体で大事にしていく必要があると思います。

庄司 親の仲間づくりをすると、子どもも一緒に育つ。このことをぜひ知ってもらいたいなど感じています。

まずは、「ママ同士が集まって、一緒に悩んだり助け合ったりしながら子育てを楽しんでほしい」と思って活動しています。地域の大人も一緒に加わってくれるともっといいですね。

金井 初めてのお産をするときはゼロからのスタートです。この時期はママたちもパパたちも準備ができていないのだなという認識をまわりの人たちがもって、「フォローするよ」という優しいご近所さんになってくれたらいいですね。

父親のサポートも大切

金井 久喜んこでは、パパの応援もしています。イクメンが取りざたされてから数年。ママに協力したい、助けたいと思っているパパが増えていると感じたことをきっかけに、パパ

同士のつながりも広げられたらと木工や焼き芋会など様々な企画をして会を開いてみました。でも企画が終了したら、すぐに解散してなかなか次にはつながりませんでした。

そこで、土日にパパのためのおしゃべりサロンを開くことにしました。サロンではパパたちの話を聞いて、パパたちががんばっていることがよくわかりました。ただ、ママの思いとは少しずれてしまうことがある。どうやったらうまくいくのかと頭を悩ませている。そんなときに、NPO法人ファザーリングジャパン^{*1}代表安藤哲也さんとの出会いがあり、パパが笑顔になることがママも子どももハッピーになるんだということをパパたちに伝える集まりを開きました。パパだけトークの時間もあり、悩みなども話したりしたあと、「いい笑顔」で帰るパパたちを見て、今後に期待したいなと思いました。



絵本ライブ

て試行錯誤中ですが、今年は、あらたに子どもと遊ぶサロンやマタニティに特化したおしゃべりサロンも試みる予定です。

また、「子どものことを知ること」を体験として学ぶ機会が必要だと思っているので、学校の授業に協力し地域の子ども(小学5年生、中学3年生※2)と乳幼児の親子や大人がふれあい、「いのちの学習」をする事業を続けています。小・中学生にとっては、小さな子どもたちとふれあったり、ママたちの話を聞いたりして「子どもってかわいい～!」「産んでみたい。」などの声が聞けたり、子育て中の親たちからも「小・中学生って恐いイメージがあったけどかわいい。10年後が楽しみになった。」など、嬉しい反響があります。これは地域の大人たちが地域の子どもたちを知る機会にもなるので、地域の大人たちも参加してもらい、すべての学校で実施してほしいですね。

子どものことを一緒に考えていく人がたくさん増えることを願い、これからも活動を進めていきたいと思っています。



パパサロン

地域の子どもの成長を 一緒によろこびあえる あたたかいつながりを つくっていきましょう

金井 親たちが自分も大事にしながら子どもと関わっていく(楽しく子育てする)ために、私たち地域の大人になにができるのか。ずっと考え続け

*1 NPO法人ファザーリングジャパン
法人設立が2007年4月4日。
父支援事業による「Fathering」の理解・浸透こそが、「よい父親」ではなく「笑っている父親」を増やし、ひいてはそれが働き方の見直し、企業の意識改革、社会不安の解消、次世代の育成に繋がり、10年後・20年後の日本社会に大きな変革をもたらすということを信じ、これを目的(ミッション)としてさまざまな事業を展開しているNPO法人。

*2 小学校では二次性徴のことを学ぶ授業が4~5年生で、中学校では家庭・保健の授業が3年生で実施されることから、小さい子どもと小中学生とがふれあう体験(いのちの学習)事業を行っています。

災害ボラセン 運営の現場

今後も多発することが想定される災害。今だからこそ知りたい災害ボラセンの設置・運営にあたっての基本的な考え方を、災害支援の経験豊富なひのぼらねっと・山下さんが対談形式で毎回紹介します。



日野ボランティア・ネットワーク

広告制作、FMラジオ局の仕事を経て、30代で滋賀県朽木村に移住。木こり生活を経験後2003年に朽木村社協に入職。2005年合併に伴い高島市社協職員として地域福祉・ボランティアセンター担当を経て2015年4月から現職。

2000年、旅の途中で鳥取県西部地震に遭遇し、日野町でボランティア活動。被災後の地域づくり活動を継続している。県内外で防減災や支え合いの取り組み支援を行い、災害時には社協やNPOなどのネットワークをいかして支援にあたる。

日常・災害時に社協職員としてどう行動するか

滋賀県高島市社協へおじゃましてきました。

対談時に高島市社協事務局長を務めていた馬場 八州男(ばんば やすお)さんにも同席いただきました。

2005年、高島郡5町1村が合併して高島市が誕生した。

2013年台風18号による被害状況：9月16日午前3時・午前4時5分に市内の4圏域(旧町村域)へ避難勧告を発令。5時頃に鴨川が決壊した。浸水被害は広域で発生した。床上浸水109世帯(このうち約90%が高島地域に集中)。山間部では土砂災害も随所に発生した。

災害VC設置：9月18日(水)ボランティア募集、活動開始。被害の大きい旧高島町南鴨地区と、距離の離れた朽木地域にサテライトを設置。

発災時の社協・職員の動き

山下 2013年の台風18号発災後の初動時に、高島市社協はどう動いたのですか。

井岡 大雨が降り出した9月16日(祝)未明に職員から自分が暮らす地域の状況を伝える電話やメールが私に入り、「自分の安全を確保して、明るくなつてから動くように」と指示を出しました。夜が明けて、行政から速報的な情報を得て、動ける職員で被害が発生した地域を目視で確認に行きました。この時には明日(17日)は、職員が担当地域の住民に電話をして、現地を目視で確認し、住民から話を聞いて、被害状況やニーズを把握しようと決めていました。

在宅介護課職員は、発災した16日に、①自身の地域で避難して、避難所で支援活動をしていた②出勤して利用者の安否確認をしていた③避難所にいる要援護者の入浴を受け入れる対応をしていた等、各自が動いていました。

山下 災害対応の指針がかなりしっかりしているように思えるのですが、明文化したものを作成しているのですか。

井岡 災害時の行動指針(表)はあります。しかし、災害時はマニュアル通りに事は進みません。社協職員としての日常の自分の役割を背景に、どう動けばいいかを考えて、職員一人ひとりが行動できたのではないかと思います。

山下 とくに指示がなくても、それぞれの職員が動いていたのですか。

井岡 そうです。これは組織風土として意識を育てていきたいですね。

山下 この行動指針もすごいですね。

井岡 部門横断でプロジェクトチームをつくって、「こういうことが大事やな」と話し合ってつくったものです。

山下 とくに最後の部分は職員が自ら動くことを象徴する指針ですね。

井岡 むろん、すべて経験と勘だけで動いたわけではありません。とくに災害VC開設直後は、とにかく走り続けることになります。ですので、1週間後くらいに「なにか漏れていることがないか」とふと不安に思い、よそのマニュアルもチェックしました。そのとき備忘録やチェックリストはあったほうがよいなと気づきました。

なぜ、職員が主体的に動けるのか

山下 ここからは高島市社協職員が主体的な判断で動ける理由を掘り下げていきたいと思います。

馬場 発災当日の朝から職員が各自で動いていました。これだけの災害が起きているのだから、「いま必要なことはなにか」「いますべき行動をとるのは必然だ」という認識は、一人ひとりが動いているなかでもっていたと思います。

これは、なにか訓練をしたというわけではなく、日頃の積み重ねだと思います。例えば、毎月行っている社協の経営会議の場などで、介護事業も含めて出席する管理職等の職員に、地域の集落を主体とした見守りの状況を伝えたり、災害対応の考え方を伝えたりしながら情報共有をしています。こうしたことが一人ひとりの職員にも浸透すれば、いざというときに「今やるべきことはこれだ」「法人としてはこう考えるだろう」ということが判断できて、指示を仰がないでもおのずと動くことができます。組織として、このような状況をめざしていました。

井岡 重要なことは、日頃から住民とどう向き合っているかというワーカーの姿勢です。地域の人の暮らしを支えるということ、いま、なにをしっかりと見なければならないのか。これは日常も災害時も一緒です。

山下 社協のミッションや、ふだんの取り組みや動きで「なぜ、これをこうするのか」という1

つ一つのことが、深い部分で共有されているのです。

井岡 はい。社協職員はどこを向いて仕事をしているのか、ぶれていなければいけないと思います。

馬場 いま、高島市社協のBCP(事業継続計画)もつくっているところです。

山下 個々の取り組みもですが、高島市社協は、やはり総合力がすごいのだと感じました。ただ、もともと高島市にしかない資源や環境があったということでは必ずしもないですよね。お二人の話を伺っていると、組織としてのビジョンやミッション・方針・事業・職員の行動といったものがきちんとつながっていて、いろいろなことに関して住民と一緒に話をする場を社協がずっとつくりってきたことがうかがえます。社協から問題提起をしたり、それに対して住民がどう思うのか聞くことで住民も社協も……。

井岡 影響し合って成長してきたのだと思います。

山下 高島市社協のミッションを地道にちゃんとやってきたということなのだとお話を聞いていて感じました。

高島市社会福祉協議会職員災害時の行動指針

私たち高島市社協職員が、災害時にも大切にしたい10か条

- ①自分や家族の命を大切にする
- ②地域の救護、救援活動への積極的な参加
- ③正確な情報把握
- ④社協職員としての主体的行動を取れる力
(マニュアル依存や上司の指示待ちではなく)
- ⑤被災者の声を聞く
(二つの把握、被災者相談体制)
- ⑥住民や関係機関と連携し、ネットワークで被災者支援活動をおこなう
- ⑦家族や地域の理解を得る
(社協の役割を知ってもらう)
- ⑧災害支援や防災に関する積極的な研修や訓練参加、自己研鑽を重ねる
- ⑨日頃から、自分の暮らす地域のことを知つておく
(地理や地域特性など)
- ⑩孤立無援の状況におかれても、高島市社協職員は「理念と行動規範」で繋がっていることを忘れずに勇気を持って行動すること

ボラセンそもそもヒストリー

1940年代 ボラセンの芽生え

さて、先月号でお話したとおり、いよいよ今月から日本のボラセンがどのようにして作られてきたのか、その歴史を探っていきたいと思います。まずは、その芽生えからです。

「博友会」と「大阪社会事業ボランティア協会」

その萌芽の一つは、戦後間もない1947年発足の東京の「博友会」です。中間支援組織とまではまだ言えないかもしれません、戦争引揚者の支援のためにボランティア(以下V)募集を呼びかけました。

もう一つはその翌年発足の、大阪で、大阪市の支援で大阪市民援護会、朝日新聞厚生事業団等により「大阪社会事業ボランティア協会」です。児童福祉施設のVコーディネーション、大学生等若者のV体験、啓発活動、子どもの遊び場づくり等を行っていました。その経緯について岡本(2008)は、当時先駆的に募金活動を行っていた市民援護会が、

共同募金会の設立によりその存在が希薄化したことを指摘しています。つまり、それが逆にバネとなり、「カネ」ではなく、「ヒト=V」に着目した組織の設立に繋がったのではないかというのです。やはり、「ピンチはチャンス」なのです。

驚きの先駆性

協会の発会式には、研究者岡村重夫執筆による、Vの本質、価値などについて書かれた資料「アメリカ社会事業のボランティア」が配布されました。また、施設のVのニーズ調査が行われ、受け入れ施設への要望として「V受け入れ要領」、施設長あてに「V配置の適正化」の文書、更には会員と施設関係者による「V懇談会」の開催等、Vがより良い形で活動できるよう事業を展開しています。この組織は、大阪市社協の設立に伴い、吸収される形で2年半で姿を消しますが、現代のボラセンにおいても大切で必要とされていることが、この頃すでに実践されていたということになります。

ちなみに、協会が設立された1948年は、社会保障の重要性を説いた「ゆりか

ごから墓場まで」で有名な『ベバリッジ報告』(1942)を記したイギリスのベバリッジが、公的支援だけでは社会は成り立たず、市民による自由なV活動が重要なことを訴えた『ボランタリー・アクション』を刊行した年と同じです。また、今でこそ「V」は日本語のように定着していますが、「ボランティア」という表現からもわかるように、当時の日本はそのことばも意味も、まだまだ一般化していません。そのような時代に、このような組織が日本に存在していたとは……。その先駆性には、誇りと感動さえ覚えます。

その後、この二つの組織は、それぞれ進化とある意味での再生を果たしていくのですが、詳細は以降にしたいと思います。

主な参考文献

岡本榮一、大阪社会福祉史研究会(2008)
『大阪における社会福祉の歴史 特別号
「大阪社会事業ボランティア協会」の軌跡』 大阪市社会福祉協議会 大阪市社会福祉研修・情報センター

団体を応援するために 知っておきたい助成金のキホン

第2回 助成が「当たる」ことは絶対、ない

仲良くなりたい人を食事に誘うとき、あなたならどうやってお店を決めますか?

Aさんは、これまでに一番感動したお蕎麦屋さんにBさんを誘いました。どんなにその店のお蕎麦がすばらしいかを説明してお誘いしましたが、断られてしましました。なぜでしょう?…Bさんは、蕎麦アレルギーだったのです。

実は、これと同じことが助成の世界でもよく起こっています。「私たちの高齢者への支援活動はこんなにすばらしいんです!」と一生懸命伝えているその助成の趣旨が、「子ども支援」活動とか。結果は明らかですよね。「助成にハズれた」のではないです。助成は思いを持ったお金です。自分たちが大切だと思ってい

ることを自分たちよりも上手に行ってくれる団体を探し、信じて、託すこと。それが助成の「採用」です。採用不採用は運ではなく、必ずそうなる理由があるのであります。

助成先の思い・好みを知った上で応募しましょう。実現したいと思っていることは何か、助成する費用は何か、そんなことがすべて書いてあるのが「応募要項」です。数打っても当たりません。自分たちの活動や応募したい費用に合う助成を、応募要項を見て「選ぶ」ことが必要です。

さらに。どんな助成にも同じ内容で応募するのをやめましょう。面接にスニークで行きますか? キャンプにスーツで行きますか? 場面に応じて服装を

助成金の応募や、活用のために押さえておきたいポイントを毎月わかりやすく教えていただきます。

変えますよね。助成の応募でも、活動の見せ方や重点を置く場所を助成先の希望に合わせるので。でもこれって団体の人たちは気づきにくいこと。そこで、VC職員やVコーディネーターの出番です。要項を読んで、活動の切り口を選ぶお手伝いをしてあげてくださいね。



中央共同募金会
企画広報部

城 千聰さん

2003年から都内社会福祉協議会でボランティアコーディネーターとして勤務。2011年4月より現職。現在は主に東日本大震災の被災地で活動するNPOなどを支える「災害ボランティア・NPO活動サポート募金(ボラサボ)」の助成金を担当し、これまでに4300件以上の応募書を読む。ボラサボ公式Facebookページで情報発信中。



もしも事故が起つたら？



全社協「ボランティア活動保険」ご加入の皆さんへ

ボランティア活動中の安全には細心の注意を払っていても、事故はいつ・どこで起るか分かりません。万一、事故が起つてしまった場合、どのような手続きが必要なのか、また注意しなければならない点についてお伝えします。

事故が発生した場合は、応急措置などの必要な初期対応を行い、以下の手続きをお願いします。
すみやかに、“加入申込み手続きを行った社会福祉協議会”に、次の事項をご連絡ください。

(社会福祉協議会より保険会社宛てに事故報告いたします)

- ① ボランティアの氏名、住所、連絡先
- ② 事故発生の日時、場所
- ③ 事故の原因、状況
- ④ ケガの程度、病院名（傷害事故の場合）
- ⑤ 相手の氏名、住所、連絡先、ケガまたは損害の程度（賠償事故の場合）

保険会社の担当者が事故報告の内容とともに事故状況などを確認のうえ、適切なアドバイスと保険金請求についてご案内いたします。

【ご注意ください】

- ・事故発生日から30日以内に事故報告をいただけないと、保険金を削減してお支払いする場合がありますのでご注意ください。
- ・賠償事故の場合は、示談に際して保険会社の承認が必要ですので、必ず事前にご相談ください。保険会社の承認なしに示談された場合には、保険金を削減してお支払いする場合があります。
- ・グループの会則に則り企画、立案されたボランティア活動、もしくは社会福祉協議会に届け出た活動かを確認する場合があります。
- ・保険金請求権については、時効（3年）がありますのでご注意ください。

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp/>

ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

ボラフェス ふくしま番外編



プレゼンター

第24回全国ボランティアフェスティバルふくしま実行委員会委員会長

ふくしま総合相談支援センター長

とおの
遠野

かおり
馨さん

2015年の全国ボランティアフェスティバル開催地・福島。 福島のことをもっともっと知って皆さんもボラフェスふくしまに参加しましょう！

ボランティアフェスティバルのメイン会場になる郡山市は、水がきらめき縁いっぱいの自然豊かな都市。縁に恵まれた環境から、おいしい野菜やお肉の産地で有名です。

そして、あの有名なGReeeeeNが活動を始めた地でもあります。

そんなグリーンをキーワードに地元を愛する想いを、みんなが大好きなカレーでアピールしようと誕生したのが「こおりやまグリーンカレー」です。

新しいご当地グルメとして、各店舗で地産・地消をベースに考えながら、健康や安心につながるカレーを提供していますので、ボランティアフェスティバルの際には、是非、郡山のグリーンカレーをいろんなお店で楽しんでください。

郡山グリーンカレー愛好会アドレス
<https://ja-jp.facebook.com/koriyamagreencurry>



全国ボランティアフェスティバルふくしまの円滑な開催、運営に資するための寄付金及び協賛広告を募集中

アドレス
<https://www.facebook.com/volufesfukushima>

「ボランティア情報」では、みなさんからのご意見や情報を募集しています。

ご意見ご要望等どのようなことでも結構です。企画の参考とさせていただきますので、全国ボランティア・市民活動振興センター(vc00000@shakyo.or.jp)までお知らせください。

事務局だより

この4月から配属になりました大場です。今回は特集のうちのひとつ、久喜んこ様に現地取材をさせていただきました。取材をする中で感じたことの一つは、やはり子育て世代にとても地域とのつながりがとても大切であるということでした。これから取材などを通じてより多くの方とのつながりを大切にしていきながら、皆様にたくさんの情報をお伝えしていただかと思っていますので、ボラ情共々よろしくお願いします。(大場)